

遠藤が言葉を続けている。

「役職のほうは、差し障りがあったので明かせんが、ご気分を悪くせじもらいたか」

藩名を名乗ったせいかな、言葉の訛りを隠そうともしていない。

「こんなび、我ら咎人を追って、鹿兒島をあとしもした」

弥一郎は、それを聞いて一瞬身構える心持ちになった。かつては自分も脱藩した身である。妻を伴い、追っ手がかかるのを怖れながら山道を急いだことが、いまさらのように甦った。それも随分

出しもした」

弥一郎は、それはどのような物かと尋ねたが、藩の大事に関わることなのでいまは言えない、いずれときを見て、と言葉を濁された。

「甘蔗ではありますまいな」

弥一郎が相手の表情を探るように言った。

遠藤の笑顔が、ほんの一瞬凍りついたようになってた。それを弥一郎は見逃さなかった。佐島の目が鋭くこちらを注視している。

「とにかく」

と遠い過去のことになってしまったが、あのときの警戒心が少なからず戻ってきて、心身に緊張が走り、表情がこわばった。それをどう誤解したのか、遠藤が膝を進めてきた。

「そんなおいです。どげんがこつあつても、そ奴ば捕らえんと国にな帰れん」

それには弥一郎の手助けがいる、と言うのである。

「一体、どんな罪を犯したのでござろうか」

「藩外持ち出しを固く禁じられとうの物を持ち

と、遠藤は何食わぬ顔を装って話し続けた。そ

れによると、大隈郡奄美大島の豪族の三男で当盛喜、のちに名改めて閑良助なる者が、かれこれ一年ほど前にその御禁制の品を持ちだした。そして、模造品を多く作ろうとしている。その男の逃げ込んだ場所は、讃岐の国大内郡湊村というところであると、先般判明したと言う。

捕らえて連れ帰りたいが、かの高松藩は徳川家の親藩である。その藩内で、我ら薩摩の人間がこ

え、外様の雄藩として幕府に睨まれているので  
危険は犯せない。高松藩ではそれをよいことに、  
その者を庇護しているようだ。だからと言って、  
このまま罪人を放置することはできない。そう捲  
し立てたあと、薩摩の物を持ち出した奴ばらは皆  
有無を言わず、斬ってしまったてもよいのだ、と言  
って興奮のあまり声を荒げた。

「義は我らにあいもす。御存じんかも知れませ  
んが、薩摩藩は、天明八年には幕府より金  
二十万両の上納、および禁裏と二条城の普請手

遠藤が付け加え、懐から袱紗に包んだ物を取り  
出して畳に置いた。

「金五十両あいもす」  
袱紗を開き、和紙にくるんだ切餅を二つ出して  
弥一郎の目の前に置いた。

「相手の男は、剣を少々遣いもつす。手に余  
れば斬つてもよか。首尾よういつた暁には、あ  
と五十両をお渡しもす」

桁外れの謝礼に弥一郎の心が乱れた。畳の上  
に置かれた金子の背後に、普請後まもない道場の

伝いを命じられておりもす」

盗難品によってこうむる財政上の不利益は膨  
大で、ために、この先幕府が押しつけてくる難題を  
かわしていくことができなくなるかもしれない。  
藩が危機存亡の淵に立たされる怖れがある、と言  
うのである。遠藤は弥一郎の目を見つめなおした。

「風間弥一郎どのの直心流の腕前をお貸し願え  
まいか」  
遠藤は言葉にこそ出さなかったが、藩外持ち出  
し禁制品の品と言うのは、甘蔗のことに違いない、  
と弥一郎は思った。については礼金のことだが、と

板敷きで、門弟に指導している自分の姿が、忽然  
と浮かび上がった。彼は慌てて小首を強く振って、  
それを追い払った。金は欲しいが、家を捨て、藩を  
捨て、かつては剣の道に生きようとした自分が、  
いまここで他藩の刺客に成り果てるわけにはいか  
なかつた。

それに、先刻の男たちの殺気は本物だった。あ  
の夕刻の恨みが残っていなかった、とは言えまい。  
物の用に立ちそうもないなら抹殺してしまおう、  
くらいに思っていたに違いない。気に食わなかつ

た。だが、ここまで話を聞いた以上、ただでは許してくれまい。そう思った。

弥一郎はやおら立ち上がり、部屋の隅に無造作に投げやっっている信玄袋の底から例の甘蔗の苗を取り出してきて、遠藤の前に置いた。

「お話はよく分かりました。さすれば、これはお返し致そう」

遠藤の顔が一瞬強張ったが、すぐに喜色を浮かべて言った。

「おお、引き受けて下されっとか」

「ほなこつ、信じられん」  
そう言つて片膝をつき、刀の柄に手をかけようとしたとき、遠藤が鋭く言葉を投げた。

「もうよか」  
「じあんどん……」  
佐島は遠藤のほうを見たあと、気抜けしたように浮かした腰を音立てて下ろした。そのまま背を丸め、呆然と畳に目を落としている。

「……まこち口惜しか……。小百姓どもが、薩摩の甘蔗を我が物のごと栽培し、田畑に杭まで打つて、誰いも触らせん、とゆていきまいとうら

弥一郎は、目の前の切餅を押し返しながらかきつぱりと言つた。

「その件はお断り申す」  
「いまさらそげなこつが許されうか」

佐島が目を剥いて刀に手を伸ばそうとしたが、さつき受けた脇腹の傷が痛んだのか、顔をしかめた。弥一郎が佩刀を引き寄せながら、その顔を睨みつけた。

「いまお伺いしたことは、誓つてどこにも漏らさん。ご安心召されい」

しか  
その言葉が、弥一郎をたちまちあの忌まわしい過去へと連れ戻した。

「小百姓どもが誰にも触らせん、だと……」  
弥一郎に歯ざしりする思いがかすめた。頭の中には、甘蔗を手に、百姓たちに打たれる惨めな己の姿があつた。妻の蒼ざめた顔があつた。それらがぐるぐると甘蔗畑を背景に回っていた。随分と刻が流れたようである。

「それでは、失礼をしました」

弥一郎は、我に返って声のする方を見た。二人が表情を固くして、襖障子のところに立って会釈していた。遠藤が佐島を促して背を見せようとしたとき、弥一郎は思わず声をかけていた。

「その仕事、引き受けましょう」

遠藤の面持ちが、驚きから大げさなほどの

喜びに変わった。

「ありがたかあ」

佐島がその背後で薄笑いを浮かべている。食えない奴だ、と弥一郎は思った。

寛政二（一七九〇）年の大雪（十二月七日）を過ぎた頃、弥一郎は、遠藤の忠告を入れ、彼らと行動を共にしていったんだ坂に出て逗留した。

そのあと三人は、虚無僧姿に身を変え、金毘羅への参詣者にまぎれて瀬戸内海を渡り、丸亀港に上陸して金毘羅大権現に向かった。他国者としてあらぬ疑いをかけられないようにするための策である。参詣のあと、四国遍路の巡礼者に交わり、金毘羅街道を高松城下へと歩んだ。

途中、弥一郎は、城下にて吉報を待つと言う

それから一刻ばかり、三人は、遠藤が懐からとり出した絵図の上に覆い被さるようにして、話をしていた。声は密やかであったが、時折、激昂するような若い声が混じった。

弥一郎が彼らを見送って道場の玄関に出てみると、日はとっぷり暮れていて、田畑に落ちていた木立の影は、その色合いをすっかり暗闇に奪われてしまっていた。

七

薩摩藩士たちと別れ、長尾街道をひたすら南東に歩んだ。宿を取ったのは街道上数少ない人馬継立所の池戸である。

翌朝、再び旅装を整えて街道の土埃にまみれ、山間部を通り、長尾、石田、富田を越えて志度街道に入ったのち、一路、大内郡港村を目指した。金毘羅からおよそ十五里の旅程である。

昨晚の間にうつつすらと積もった雪を踏みしめて歩いていると、讃岐平野の小高い山々が四方から弥一郎を包み込むように感じられた。見慣れた

畿内や中国の山と異なり、それらは、突如平野の  
中から飛び出したように見える。気の遠くなるほ  
どの長い歳月を経たのち、讃岐独特の固い火山岩  
が浸食を受けずに残って山となったものなのだ  
が、そんな知識を持ち合わせない弥一郎にとって  
は、まことに奇妙な光景でしかない。

〈土地が変われば、山容までも変わるものなの  
か〉

旅をする開放感が心に溢れている。大内郡に入  
ったあと、緩い下り坂となった。弥一郎は、雪間に

頭を覗かせている小石を踏みしめながら、ゆつく  
りと下っていく。夕日が背後の山並みに沈もうと  
する頃には、海岸沿いの街道上に立った。人家や  
樹木の向こうに、穏やかな瀬戸の海が広がってい  
る。

三本松に着くと、一軒の薄汚れた旅籠に上がっ  
た。大坂を出帆して八日目である。密かに甘蔗の  
栽培をしているらしい湊村までは、あと半里もな  
いはずである。

(以上2月25日放送分)